



日本 第三の 開国

中国人記者のみた日本
李順然著

日本第三の開国

中国人記者の見た日本

李順然著

東方書店

著者略歴

李 順然（リ シュンラン）

1933年東京生れ。暁星・明治学院で学び，帰国後北京放送局勤務，北京放送東京支局長などを歴任。現在同放送局編集委員兼日本語部部长，中国中日関係史研究会理事，翻訳学教授。

著書：『わたしの北京風物誌』（東方書店）

日本・第三の開国——中国人記者のみた日本

1990年12月10日 初版第1刷発行

著 者 李 順 然

発 行 者 安 井 正 幸

発 行 所 株式会社 東 方 書 店

東京都千代田区神田神保町 1-3 〒101

電話 (03) 294-1001 振替 東京 4-1001

営業電話 (03) 937-0300

装 幀 国 田 裕 子

印刷・製本 薦友印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©1990 李順然 Printed in Japan

ISBN 4-497-90315-X C0098

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。直接小社までお送り下さい。

はじめに

わたしは東京で生まれ、少年時代と青年時代のひとときを東京で過ごしました。そして、十九歳のときに中国に帰り、もう四十年近く北京で暮らしています。この間に、鄧小平さん（一九七八年）らの訪日のさい、随行記者として日本を訪れたことはありますが、いずれも一月たらずの短い滞在でした。中国の成語でいう「走馬看花」（馬の上からの花見）の旅だったのです。

今度は北京放送東京支局の支局長としてやって来ました。そして、二年半ほど東京で暮らしました。丁度、日本の歴史が昭和から平成に移る時期でした。こうした日々の、日本での見聞を折り折りにメモし、そこからピックアップしたのが、この本に収められた雑文なのです。本のタイトルは「エッセイのタイトルのなかから」として『日本・第三の開国——中国人記者のみた日本』にしては……』という東方書

店の安井正幸社長の提案によるものです。

この提案に接して頭に浮かんだのは「餅屋は餅屋」ということばでした。つまり実に適切なタイトルを選んでくださったと思ったのです。わたしの雑文「第三の開国」は帰国の日も迫ったある日に書いたものです。「経済大国」から「政治大国」への歩みを早める日本——この日本が、これからどんな道を歩むか、これはこの二年余、わたしの最大の関心事でしたし、中国の同僚とはもちろん、日本にいるアジア諸国の人たちとの話しあいの席でも、いちばんよく話題にのぼるテーマでした。だれもが、これからの日本が中日友好の道を歩むことを、アジアの平和・友好・繁栄に役立つ道を歩むことを切に望んでいました。だれもが、これからの日本がアジアの国々を平等な眼・暖かい眼でみて、アジアの国々に真に心をひらくよう切に望んでいました。もちろん、わたしもその一人ですが……。『第三の開国』の一行一行には、二十一世紀の日本がこうした願いにかなう国であって欲しいと思う気持ちが込められています。タイトルはさまざまですが、この本に収められた雑文のどの一篇にも、わたしはこうした願いを込めて書いたつもりです。

主観的な点多々あると思います。事実誤認もあるかも知れません。読み返してみると、なにか日本と日本人たちへの意見がましいものが多くなってしまうようです。生れ故郷である日本とそこに住む日本人たちに寄せる一中国人の、一アジア人の希望と期待が込められているものとして読んでいただければ幸いです。

雑文と雑文のあいだに、一緒に日本に来ていた家内（千叔方）の画帳から何枚か雑画を借用して入れてみました。家内は大連生まれ、上海美術専門学校でデザインを専攻していたことがありますが、絵を描くのは四十年ぶりだとのことです。乱文拙画で失礼。

も
く
じ

はじめに

そんなに急いで…… 3

神田の本屋さん 8

井上靖先生のお宅で 14

一ドイツ青年の投書 21

西の京の散策 27

日本・第三の開国 33

日本人残留孤児の養父母 38

新幹線の旅 43

電車のなかの居眠り 50

アジアを見る眼 55

北京の空 東京の空 63

東京のお正月 68

ジェローム先生とハナフォード先生 74

飛驒の高山と韓志和 86

国際と人際、国際と国粹 92

心のゆとり 98

変った東京、変らない東京 105

テレビのチャンネル選び 111

明るい二十一世紀を遺そう 116

猿之助と京劇 121

ことばのあいまいさ 127

東京の廖承志像 133

徳川家康と蝦夷錦 140

わたしの不安 149

地下鉄・タクシー・清掃車 159

徐福の伝説 165

八月の東京に想う 171

東京だけが日本じゃあらへん 175

はじめ——昭和から平成へ 181

東京あの花この花——再見さようなら 東京！ 188

おわりに 194

日本・第三の開国——中国人記者のみた日本

そんなに急いで……

北京放送の東京支局長として日本に来たのは、一九八七年（昭和六十二年）の十二月、年の瀬のことです。先任の支局長がまだ帰国していなかったので、しばらく東京広尾の有栖川公園の近くに仮住まいしていました。

雪の降った次の日のことでした。この仮住まいの近く——有栖川公園と愛育病院の横を入った通りで、雪をかぶった赤い立寒椿たちかんつばきの花を見かけ、心をひかれました。それから、ときどきこの通りを散歩するようになりました。中目黒の支局に移ってきてからも、広尾の方に出かけると、ちょっとまわり道をして、この通りに足を伸ばして散歩を楽しむのでした。とくに立寒椿の花の咲くころは……。

有栖川公園の常緑樹の緑の木立ちの傍ら、図書館やテニスコート、幼稚園などの点在するこの通りは、人工的に波状なみじょうのゆるやかなカーブがつけられており、道行く

人の歩みも、おのずから散歩とでもいうのでしょうか、ゆるやかな足どりになるようです。また、軽い勾配もあり、足もとには茶褐色の洒落たタイルが敷かれ、道行く人も車も少なく、立寒椿の花の赤と葉の緑をながめながら、冬の都会の散歩が楽しめるのです。この通りの散歩は、わたしを、しばし東京という大都会の雑踏から解放してくれるのでした。

でも、こうしてゆっくり散歩しているわたしを、電車の乗り換えのときのようなスピードで追い抜いて行く人にも出会います。ただでさえ慌しい東京、それがこの都会のもつ特長なのかも知れませんが、せめてこの静かなプロムナードぐらいは、ゆっくり歩いてはどうかかと、追い抜いて行く人の背を見ながら思うこともたびたびでした。

いづれにしろ、東京という大都会の生活のテンポの早さ、道行く人の足どりの早さは、世界一でしょう。これは、わたしの独り善がりではないようです。

日本滞在中、日本にいる外国人が『朝日新聞』のコラム欄を三ヶ月交替でリレー担当していたことがあります。わたしも執筆者の一人でしたが、わたしがバトンタ

ツチしたベネズエラ人の情報コンサルタント、ホセ・プリセニヨさんのエッセイのタイトルは『ポコアポコ』（スペイン語でゆっくり、ゆっくり）でした。このタイトルの誕生には、こんなエピソードがあります。ホセ・プリセニヨさんはリレーエッセイの第一回目で、皇居前のカルガモの引越しを、朝から夕方まで大勢の人たちがカメラを肩に一ヶ月も待っている姿をとらえ、

「世のなかには目がまわるほどいそがしく、日本人はせっかちだというのに、カルガモとなると一ヶ月も気長に待っているのは、たいへん面白いと思う。これだけ両極端の性格をもつ国民はめずらしいだろう。毎日の生活で、これだけゆっくりしてくれば日本も変わるだろう。おそらく、世界で有数のゆとりのある国になるだろう……。『ゆっくり、ゆっくり』、わたしは日本人にこう言いたい。それで、タイトルがこうなったのだ」

東京での生活のテンポの早さ、わたしもこの慌しさにもまれて、いやおう無しにこのテンポ、この足どりに捲き込まれていくのを感じることがありました。でも、有栖川公園のわきの道に差しかかると、わたしの心のなかにはいささか抵抗心がお



「ボコアボコ」(ゆづりゆづり)と
呼ぶのは有栖川公園の玉泉楼。

方
11月, 冬

こり、中国の諺にある「螳臂当車」(その細い腕をふりあげて大きな車を止めようとするカマキリ——身の程しらずを指す)のように、足どりをうんと落したり、時には立ち止まったり、さらにはちよつと引き返したりしたものでした。こうした時に目に止まる赤い立寒椿の花を見て、わたしは思ったのです。東京のあの道、この道の傍らに咲く花、一年四季、あの色、この色で道行く人たちの目を止めさせ、足を止めさせているが、背後から鞭打つように人を追う東京の生活テンポをいくらかでもゆるやかなものにしようと、ひたむきな努力をしているのかも知れないと。経済の面では戦後世界でもまれにみる早い足どりで歩んできた、いや息もつかずに走ってきた日本、道の傍らのこの花、あの花は、この国とこの国に住む人たちに「ポコアポコ」とささやきかけているように見えるのです。早いテンポで得るものも多いが、貴重なものを見失ってしまうこともあると忠告しているようにも見えてくるのです。